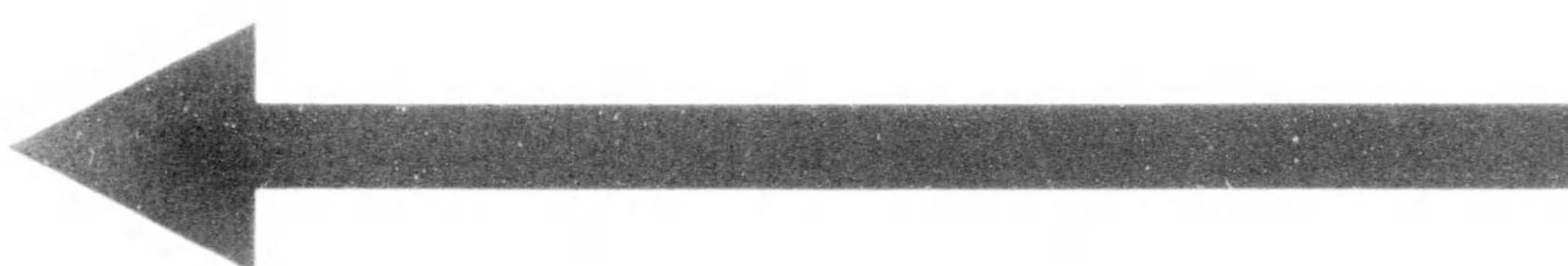


始

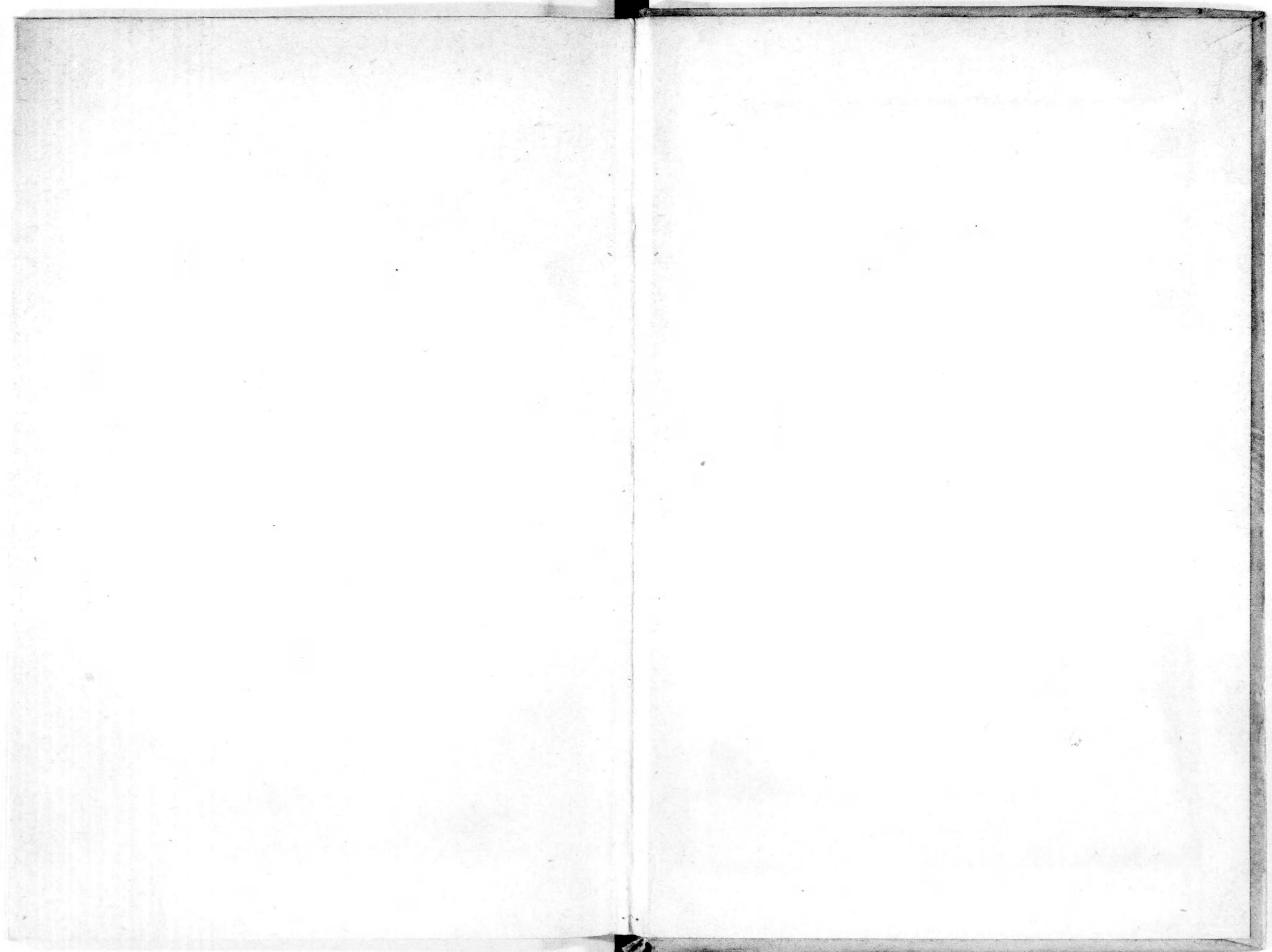


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

近藤保一著

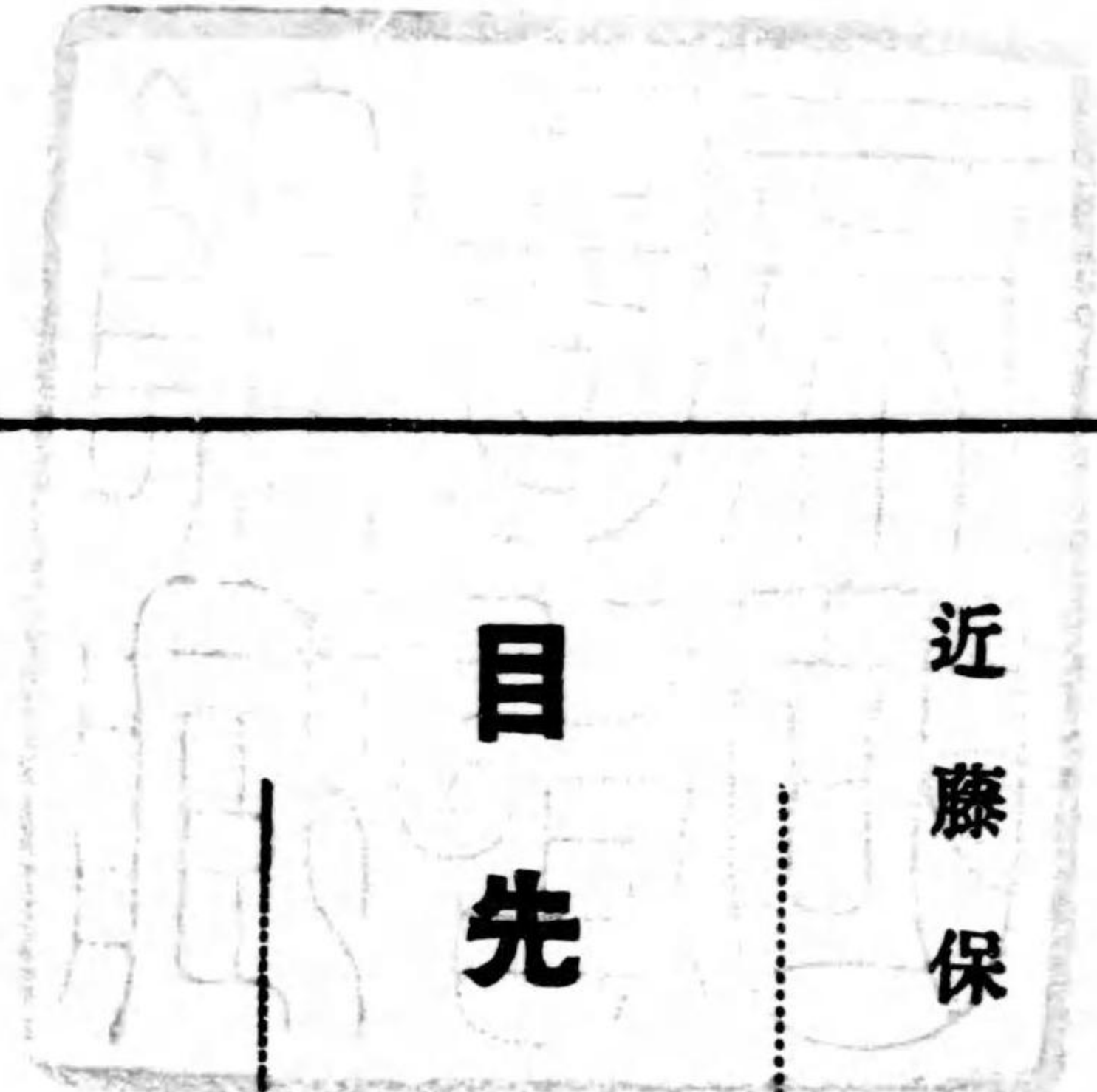
目先の野線

林興生財界研究所發行



特100

239



近藤保一著

目先の野線

林與生財界研究所發行

大正
13. 8. 11
内交

卷 頭 言

機界に携つて茲に幾春秋、予はいろくの熱心なる相場の研究者を見た。「目先の罫線」の著者近藤保一君も、またその一人である。否、著者の如きは、予の知れる範圍内に於て、その熱心なる研究家の随一人であつたらう。それほど君の研究振りは、眞剣であり、熱心であつた。而も著者は絶対に相場をやらない。名を求めず、利を追はず、學者式に孜孜として、何十年來、眞摯なる研究を續けてゐたのであつた。世に儲けんが爲めに研究する者は多い。然し研究せんが爲めに研究するものは絶無である。予は此點にいたく敬服した。予と君とは相場に對する見解を異にする。予は數を以て攻むる趙括的兵法を至道に非ずと

爲す者である。然し、君の眞摯なる研究振りを見て、予は斯くの如き人を以て、始めて相場國秘密の扉が開かれるのではないかと窺かに期待してゐた。

相場成功の要義は、言ふ迄も無く、高値に賣り、安値に買ふことにして、この外に秘訣は無い。即ち年中或は數箇月間に於ける大天井と一と天井、乃自大底と一と底とを知覺することを肝要とする。が、さて天井を知り底を察するといふ事、言ふは易く、行ふは難く、たゞ達眼の士のみ、僅かによく之れを察知するのである。

抑々、事物の攻究に、歸納推理、演繹推理の必要は言ふ迄も無い。そこで相場に對する心意發動の攻究——即ち氣配觀に就ても、歸納推理、即ち事實または經驗に基き、一般事物の理を推度するは相場の基

礎であつて、演繹推理、即ち一般の法則より特殊の事物を推究するは相場の運用である、されど歸納は相場を算盤詰めにせんとする風あり演繹は相場を理想の上に作らんとする傾あり故に歸納は固執に陥り易く、演繹は極端に走り易きものである。そこで機界に戦はんとする者は、普通の人として具ふる二つの眼の外に、更に公平といふ一眼を併せて、三つの眼を具備せなければならぬ。即ち歸納的頭腦の必要なると共に演繹的の胸襟も必要といふことになるのである。而して投機最後の斷案は、實に公平無私、虚心平氣といふことが最大の條件で、これが無くては、到底、相場の眞面目を識ることが出来ぬのである、此點に於て、近藤君の如き歸納的頭腦と演繹的胸襟を具へ且つ虚心平氣、常に相場を冷眼視しつゝある人士の眞摯なる研究は、必ずや斯界暗中

摸索の士に對して、一道の光明を興ふるものと信するのである。
 東坡カク舊く盧山カクに遊びて句あり。横觀リト爲ラ嶺側ニ爲ル峯。遠近見山ル途ニ不ニ同。
 誰識盧山眞面目。唯ニ依身ル在ル其山中。流石は大儒蘇東坡である。千年の昔、よく這般の眞理を喝破した。蓋し吾人が相場將來の高低を察して正鵠を得ざる所以のものは、横觀または側觀するが爲めである。換言すれば、身相場中にあるが爲めである。夫れ相場の眞面目は儼然として別に存し、達者たゞよく之を識る。たゞ俗眼これを觀破し得ぬのである。即ち盧山の眞面目は山を離れて之れを看るべく、相場の眞面目は相場を離れて之を見得るのである。蓋し離るゝとは虚心平氣——外物の執着を遠離して之を觀察するので、決して全然注意を没却する謂で無い。若し夫れ注意を全然没却せんか。盧山も無し、相場も無し、

甲子六月
 林 與 生 識

豈に又何の眞面目かあらんやである。聊か所感の儘を披瀝して卷首を汚すこと爾り。

附録として本巽係三市場最近の日足引を添付する
筈なりしも、印刷の都合にて省略せり。御希望の
方は一箇年分（株米糸共何年度分にも）實費金
五圓にて作成のお需めに應ず。

名前は堂々たるものですが、内容は普通の通信社と異りません。たゞ變つた點を申せば、小生等の通信は、最も正しく、最も速かに、そして最も料金が安いといふ三點にあると自負して居ります。從來主として北濱や堂島の玄人間に材料調査を通信して好評を博して居りましたが、此度、ほんとうの通信屋らしく内容を更めました。觀測は學理を緯とし、實勢を經としたもの、殊に市場の機密材料を探ぐるに最も便宜がございます。種類は株と米、無駄な事を一言も申さない主義とし、誠心誠意、素人諸君の好參謀たらんことを目的と

目次

卷頭言

第一 總序……………一

一 相場と野線學……………一

二 目先野線の原理……………六

三 相場は一種の技術……………三

第二 目先野線の作り方……………一九

一 期米相場に於ける一例……………二〇

第三 野線の見方……………三三

して居ります。

林與生財界研究所

電話西八九一番
振替大阪七二五五一番

料金は一箇月間五圓、電報料拂込の方は隨時電報で通信致します

目 次 (2)

一 野線の種類……………三
二 商内の仕掛け方……………二九
三 翌日の相場が原則……………三〇
四 当日の相場でも出来る……………三一
五 二日続く場合……………三三
六 後場寄が最安値……………三四
七 硬線と軟線……………三五
八 陽象陰象の限度……………三五
九 形勢轉換の棒……………三六
十 注意すべき相場癖……………三七
第四 各種線型の解剖……………三九

目 次 (3)

一 第一種線の解剖……………三九
二 第二種線の解剖……………四七
三 第三種線の解剖……………五四
四 第四種線の解剖……………六三
第五 變型線の見方……………七四
一 上下一致の變型……………七五
二 三點同事の變型……………七六
三 二點同事の變型……………七七
四 二日續きの變型……………八一
五 長が足と短か足……………八二
第六 其他の應用野線……………八五

相場の高低は全く錯雑してゐて、殆んど捕捉することの不可能なる観があるけれど、深く、相場高下の理法を研究する時は、眞に驚くべきばかり、秩序整然たるものである。偶々、不時の變動、其他の突

第一、總序

一、相場と野線學

近藤保一著

目先の野線

- 一 天井底値の見方……………八五
- 二 天井時代の線……………九〇
- 三 底値時代の線……………九二
- 四 月末日始の小揃ひ……………九三
- 五 來月の相場を見る秘法……………九三
- 六 來週の高下を見る秘法……………九六

目先の野線目次 完

發的事情のために、常軌を逸し、不意の波瀾を描くことがあつても、それは極めて稀なことであつて、過ぎ去れば忽ち元の軌道にかへる。即ち相場なるものは、常に一定の軌道を、ある順序を立て、理路正しく進行してゐるのである。突如として出現する彗星までも、一定の軌道があると科學者は言つてゐる。況して人間によつて作られ、人間によつて動かされる相場である。その相場に軌道の無いといふ筈が無い。その軌道を表はしたものが、即ち野線である。

相場観測の上に於ける野線學の地位は、最も明かに、最も正確に、且つ最も簡短に、この軌道を知り得る點にある。言葉を換へて言ふならば、前途高下の表徴は、何よりも早く、且つ確かに、野線の上にはあらはれて来る。野線の上には、すべての材料は勿論、人氣、勢力、何れをも含んでゐるのみならず、買方、賣方の潜んだる勢力までも暗示してゐるからである。

世の中には野線萬能者も多いが、また之を曲り棒だと貶す者も少くない。過去に於ける變動の表示に過ぎないものであるから、死兒の齡を數へるに等しいなどと言ふものも多い。而も、その野線罵倒論者も、相場が自己の見込に反して手違ひの時、窶かに見れば、矢張足取表を前にして、苦心慘憺、玉の汗を流してゐるのである。蓋し彼等が、陽にこれをクサシながら陰にこれを參考にするのは、矢張野線には、確たる眞理、捨て難い價值が潜んでゐるからで

ある。無論、歳移り星變るに従つて、これに對する見方、駈引に手加減を多少加へねばならぬ事は言ふ迄も無い。が、要するに、野線學は、かの陰陽五行説の如き迷信と違ひ、そこに科學的に解決し得らるべきある樞機が潜んでゐるのであるから、野線の種類が十分にそれを知り得られるものであり、且つその研究が十分に出來て居れば、これ以上の有利有益なる相場觀測の手段は無いのである。

二、目先野線の原理

斯くの如く、野線は相場高下の順序を明示し、過去を一目瞭然たらしめ、實に、相場豫測上に欠くべからざる寶典と稱して宜い。が、斯く重要なるがために、その種類は現在頗る多数となり、寄引足、日足、月足、陰陽足または何々足と唱へ、殆んど枚擧に暇無い程となつた。この野線の創始者は、果して何人であるか今知る由も無いが、確かに斯界の傑物

であつたに違ひ無い。抑も創始者は、何事の創始者にも、混沌たる裡より一案を立てるが故に、始め其案は多く單純なるものである。而して之を研究して複雑となし、更にまた簡短とも爲して、始めて完成し得るものである。思ふに、野線の創始者もその始めは何れの足もその一種を案出してゐたであらう。而して之を研究する後世の人士が、徒らに形状と歴史のみに重きを置き、實質を究むるに努めざりし結果、遂に今日の如く紛糾錯亂、徒らに種類のみ多

く、岐路に走り、遂に、この大寶典をして無用の長物視せしむるに至つたのである。これ全く、後世研究者の罪と言はねばならぬ。進化の理法は、常に簡短より複雑に進み、更にまた簡短に還元するにある。徒らに外形のみに走つて複雑となるのは過渡期の特徴である。思ふに、今日の野線學は、まさにその過渡期にあるものであらう。それでこそ。現在の如く、たゞ外形のみ進化し、その實質の研究は寧ろ第二義的に見られて、徒に種類のみ増加しつゝあるので

ある。されば、今日に於ける相場觀測の第一要諦はこの紛糾錯亂した多種多様の野線を、ある手段によつて、單純化し、統一化して、それによつて相場の實質、相場の勢力を知るにあると言はねばならぬ。實質の研究を第一義的としたものを選択するにありと斷せねばならぬ。

この目的に最も適つたものが、即ち日足である。何が故に日足を最良と言ふか。曰く、相場を分解すれば、委く日足の蓄積であるからである。日足は最

も相場を單純化したものであるからである。言葉を換へて言へば、日足が組織化し、且つ連續蓄積して、相場なるものゝ本體を形造つてゐるのである。更に言へば、日足は相場の單位である。一年が一日といふ單位によつて成立してゐる如く、相場もまた日足といふ一つの單位から成立してゐるのである。

故に、相場の勢力、實質、方向は、何よりも先づ日足の上に現はねばならぬ。即ち、日足の合理的見方を知悉すれば、その素質と勢力が、最も簡短に

分明するといふ結論が生れるのである。

斯くの如く、日足棒は、實に相場觀測上に於て最も重寶なものであり、これだけで既に相場の解釋に一道の光明を與へてゐると言はねばならぬに拘はらず、更に何等の進歩をも來してゐないのは、要するに、日足の解釋のみに拘泥して、その聯絡と變化の關係を忘れてゐたが爲めである。それが爲に、相場變動の核心とも言ふべき流通性を發見し得ず、折角の巧妙な罫線も、徒らに不徹底たるに止つてゐた

のである。

本野線は、これ等の點を補つて、或は統計的見地から、或は數理的見地から、或は心理的見地から、この日足を解剖し、その聯鎖關係を研究したもの、その日の勢力を見て、翌日の高下、或は翌々日の變動、並びに大勢の方向を知らうとするのである。敢て前人未發と言ふのでは無い。また百發百中と誇稱せぬ。が、長年の統計を根據とした點、應用簡便なる點に、從來の野線書、或は秘傳秘訣の類と美異あ

ることをお認め願ひたい。統計は一種の眞理である以上、本書の如き、其應用の如何によつて必ず大利を博し得ることを信ずるのである。

三、相場は一種の技術

尙ほ大勢と目先といふ事に就いて、一寸述べて置きたい。言ふ迄も無く、相場の觀測は、大勢方針を樹立することが、何よりも肝要である。然し乍ら、相場の變化は、少より中、中より大と、目先の運行に

よつて變動するものである、従つて大勢の研究も緊要であるが、組織的に相場を研究せんとすれば、更に以上、目先の研究に力を注がなくてはならぬのである。而も従來、この事を餘りに等閑視してゐた。目先と大勢とは殆んど別物であるかのやうに見られ來つた。従つて目先相場の合理的研究書と言ふものも、殆んど従來世に現はれなかつたのである。その筈であらう。その研究は餘りに困難であつて、到底、大勢觀測の場合に於けるが如き抽象的短句——假令

ば三割上げを賣れ、或は市場總弱氣の際に買へといふが如き曖昧な斷案を以て解釋を許されないからである。本書の述べんとする所は、前に言つた野線を以て、目先相場を觀測する最も容易な方法であつて、野線を緯とし、統計を經とし、聊か時代に適應する新生面を拓きたるもの。即ち足取の根本を廿四に分類しその性質によつて、前途の高下を豫測しやうと言ふのである。而も本法は頗る簡便にして、直ちに其日

より實行し得られるものである。其上、期米を始め株式、綿糸にも利用し得られる。これは本法が、主として相場勢力の發動する原理の研究に力を注ぎ、その變化性を利用したからである。要するに、眞理なるものは多く單純なものである。この意味に於て秘傳と言ひ、口傳と稱するものも、悉く適用の迅速にして、方法の簡便なもので、複雑にして多岐に亘るは、未だ堂に達せざるものである。殊に、一瞬時にして向背を決せざる可からざる相場に、複雑な

る迂法は大禁物と言はねばならぬ。
相場は一種の戦争である。また黑白を争ふ碁の如きものである。故に、一種の技術と稱しても敢て差支無い。兵に兵法あり、碁に定石あり、獨り相場に不敗の法無きと言はんやである。理を解し、法を設けて、以て賣買する時は、目先小掬と雖も斷じて危険あるものでは無く、而も之によつて大勢の向背如何も知られるのであるから、編中にある變化の妙所をよく研究の上、市場の實情と照し合せて、目先な

り大勢なり、宜しく機敏なる駈引を講せられたい。
尙ほ編中に於ける各項の例證は、つとめて新しいもの
の――なるべく震災以後の分に據ることにした。相
場に相場癖のあるが爲めと、あまりに古いものは却
つて解釋を不透明ならしむることを恐れたが爲めで
ある。この點も豫め御承知を願ひたい。

第二、目先罫線の作り方

一、期米相場に於ける一例

先づ本野線の引き方から述べやう。前に言つたや
うに、之れは日足の進化したものであるから、その
引き方も大體日足引の例によれば宜い。即ち當日の
高値と安値――所謂値引なるものを引き、これに前
場寄付、前場止、後場寄付、後場止の符號をつけ、
この四つの配置によつて、翌日の高低と相場の勢力

とを知覚するのである。期米、株式、綿糸、悉く同一の方法で宜しい。そしてこの符號は次のやうなものを用ゐる。

前場寄附	○
大引	—
後場寄付	□
大引	×

假令へば、本年五月の新甫(一日)の堂島期米は、高値(前場寄付)三十六圓八十二錢、安値は(後場六

節)の五圓八十六錢であつた。そこで九十二錢より下の八十六錢まで一線を引き、前記四個の符號を、寄付、前場止、後場寄、後場止の各所へつけるのである。當日の前場止は六圓五十一錢、後場寄は四十七錢、後場止は安値の八十六錢であるから、之を引直すと次のやうになる。

○—□—× (イ)

中間を黒くしたのは寄付より大引が安いからで、

反對に寄付より大引の高い日は、中間を白くして置く。又赤字を用ひて引いても宜い。これは相場の勢力を知るに必要なため、野線學上では、前者を陰象、後者を陽象と稱してゐる。即ち同月十三日は、寄付が四圓八十四錢、大引が五圓六十六錢で、寄付より高く引けてゐる。こんな日は陽象であるから中間を白く引くのである。そして當日は前場止が五圓十三錢、後場寄が十八錢で、高値は後場止の六十六錢、安値は前場二節の八十一錢であるから、之を引

直すと次のやうになる。



即ち前の(イ)と全然正反對の格好が出来るのである。斯くの如くして、毎日連続的に引いて行けば宜いのである。

第三、野線の見方

一、野線の種類

罫線の種類は二十四種である。尤もこの外に色々の所謂變型なるものがあつて、それ等を合すると約百種に上るのであるが、餘りに煩しいから二十四種に大別した。百種の異つた性質のものを僅か二十四種に限定したのであるから、其間多少の無理を生じたのは已を得ないが、大體の觀察ならば敢てこれでも差支無いと思ふ、運用の妙は一心に存す、要はこれを應用する人の頭腦の如何である。即ち、右二十四個の罫線を列記し、それに各々名稱をつければ

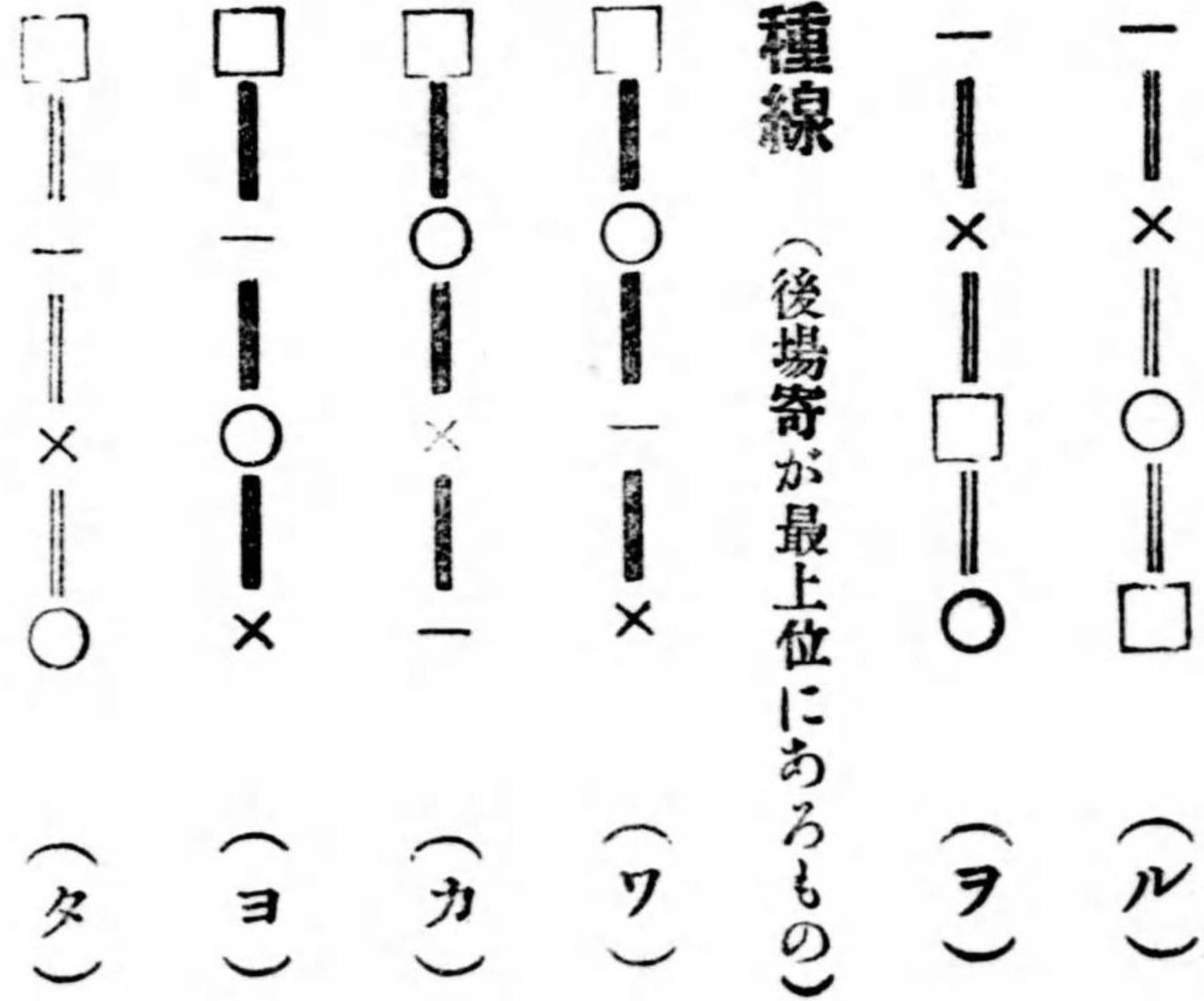
次のやうになる。

第一種線 (寄付が最上位にあるもの)

線型	略號
○ — — — — — × — — — — —	(イ)
○ — — — — — × — — — — —	(ハ)
○ — — — — — × — — — — —	(ロ)
○ — — — — — × — — — — —	(ニ)

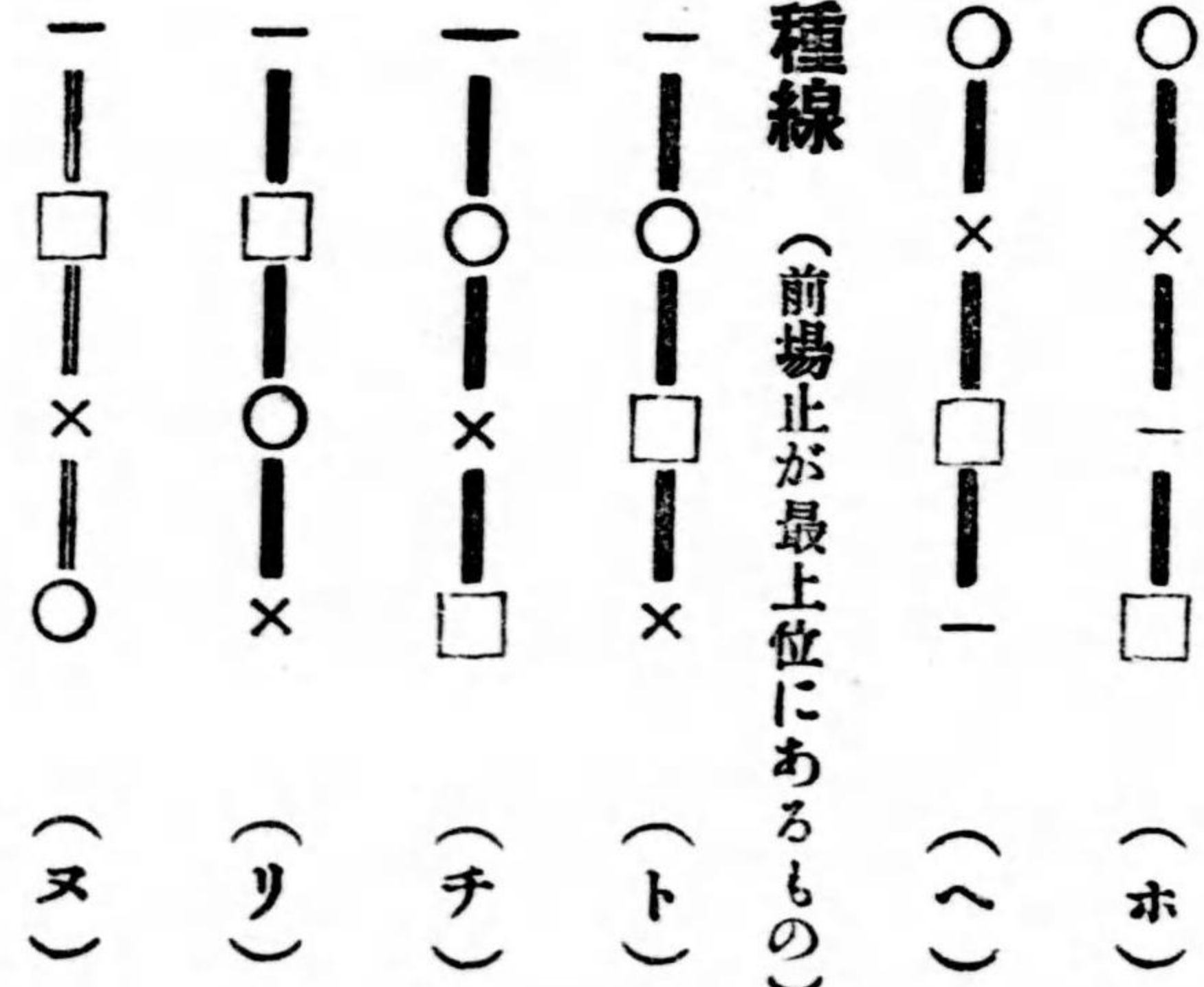
第 三 種 線

(後場寄が最上位にあるもの)



第 二 種 線

(前場止が最上位にあるもの)



第四種線

(後場止が最上位にあるもの)



即ち二十四個の中、陰象十二、陽象十二の半々づ
 りで、第一種線は全部陰象、第二種線及び第三種線
 は陰陽相央ばし、第四種線は全部陽象である。



二、商内の仕掛け方

さて問題は、この二十四個線の観方如何であるが

それを述べるに先立つて、豫め二三心得へて置いて貰ひたいことがある。

三、翌日の相場が原則

観るのは翌日の相場からである。即ち當日(ハ)の線が出現したとする。そこで後欄(ハ)の部を見ると前日(ソ)(ネ)(ウ)の外は賣れとあるから、翌日(翌日休日なれば翌々日)の寄付を賣るのである。然し線の性質によつて、前場中に賣、或は後場

寄付賣れといふのもあるから、一概に寄付ばかりの賣買と限つて無い。然し原則としては翌日の寄付を標準としてあるから、その積りで駆引をして貰ひたい。

四、當日の相場でも出来る

然しまた當日の相場でも賣買出来るのである。即ち後場大引前に接近して來ると、大抵大引値段の見當は付くものである。確かな値段は判らなくて

も、凡そ後場寄より安いか高いか位は判る。それが判れば當日の線は大體見當が付くから、翌日の寄付を待たなくても、當日の後場止で商内が出来る道理である。また指値注文、或は逆注文を試みても宜しい。假令ば前場寄付から段々下げて来て、前場止が九十銭、後場寄が七十銭であつたとする其時後場止が七十銭から上につけば(ロ)となつて買の線となり、七十銭から下につけば(イ)となつて賣の線となる。(尤も前日の模様にもよるが)、

この場合、七十銭上は買、七十銭下は賣といふ所謂逆注文を出すのである。要するに目先相場は機敏第一であるから、こんな場合の駆引を巧みにやらねば儲からない。

五、二日続いた場合

前日と當日と同じ線が続くことがある。この場合は本來の性質と反對の結果を來すから注意せねばならぬ。假令ば(イ)は原則としては賣であるけれ

ど、これが重複する時は買となる。重複した場合は常に反対の方向に動くといふことを心得て置かねばならぬ。三日連続といふことは大正九年の株界に一度あつた限り、茲十數年來見ないから説明の要はあるまい。

六、後場寄が最安値の時

統計上の結論によれば、後場寄(□印)が當日の最安値の時は、その線の力以上に騰貴するものである。

る。

七、硬線と軟線

何れの線でも、陽象は強硬な棒で、陰象は軟弱な性質と心得て置かねばならぬ。が、陽象が翌日下寄する時は、却つて軟弱となるから注意せねばならぬ。

八、陽象陰象の限度

陽象が八本も續くことは稀である。若し陽象が八本も續けば、如何なる強硬な線が出やうとも、斷然之れに賣向はねばならぬ。之と反對に、陰象が八本も續けば、如何に軟弱な線が出やうとも、斷然之れに買向はねばならぬ。

九、形勢轉換の棒

上ぐべき相場が反對に下り、下ぐべき相場が反對に上る時がある。この場合は往々形勢の轉換となる

るから注意せねばならぬ。九十頁の『天井時代の線』及び九十一頁の『底値時代の線』を参照の上適當の駈引を講じて貰ひたい。

十、相場癖せの注意

相場には月癖せ、日癖せ等といふものがあつて兎もすれば癖せを追ひたがるものであるから、此點も心得て置かねばならぬ。假令ば(ホ)の線は弱線であるけれど、二三度強硬な結果を示すと、妙に

其後の(ホ)は高い結果を示す。つまり場癖せに左
右せられるのである。故に、目先相場の駈引に通
せんとするものは、常にこの場癖せを見極める修
養を怠つてはならぬ。
されば之れより、各線について、一々観方の秘訣
を述べやう。

第四、各種線型の解剖

一、第一種線の解剖 (寄付が最上位にあるもの)

一、○—|—□—|× (イ)

この線は非常に多く出る線である。一箇年の中に
凡そ五六十回も現はれやう。元來軟弱の棒である
から、寄付成行賣をして間違ひが無い。時に前場中デ
リ／＼高くなることもあるが、後場か、遅くとも翌

前場中には下る。何れにしても、この線が出れば必ずそれ以上の安値があるのであるから、買は無論見合せ、是非とも賣の方から出ねばならぬ。殊に十數日も上げ詰めた相場であれば、この日から大勢轉換となるものと見て差支無い。

然し一二例外がある。それは前日(ウ)(チ)、或は(イ)が二日續く時などの場合には、目先却つて買つて利があるものである。又(イ)の翌日が(ロ)(ハ)(タ)の時には、往々底値となるから、其場合も買の

方が利益である。然し根本は軟弱な棒で、以上の例外の外、何れも前途に安値あることを暗示してゐるのであるから、其つもりにて駈引せねばならぬ。

二、〇———×——— (ロ)

この線も又よく出る。毎月二三回、多い時は五六回も出やう。(イ)とよく似てゐるが、反對に買で、目先の底となることが多い。そして其中の半分までは、寄付を安値として上る。殊にこれの後場寄が最

安値であれば愈々妙である。昨年まねんの十一月ぐわつの期米きまいも綿糸めんしも、共に前日ぜんじつの(ラ)から(ロ)になつて大上げおほあを演じた。本年ほんねん三月ぐわつの期米きまいもこの(ロ)で底そこを入れた。迷信めいしんのやうだが、この日ひが干支えとの戌いぬの日ひとなつてゐると大暴騰たいぼうとうがあるやうに過去くわこの統計とうけいは指示しじしてゐる。参考さんこうのために述べて置かう。尚ほ當日たうじつの伸び悩みなやの時は、既に買勢力かひせりよくの減少めつせうしたものであるから、一應中止いちおうしした方が得策とくさくである。

三、〇—□—|—x—|— (ハ)

これも出現度しゆつげんど数の多い線せんである。大體だいたいの性質せいしつは(イ)と同一どういで軟勢なんせい、また天井時代てんきやうじだいの轉換棒てんくわんぼうであることも(イ)と同様どうやうである。一月げつの新鐘しんかねはこの線せんが現あらはれて大暴落たいぼうらくの先驅せんくを爲なし、期米きまいでは一月げつ、二月ぐわつ、三月ぐわつ、四月ぐわつ、五月ががつ何れもこの線せんから下さげてゐる。然ししか前日ぜんじつ(ソ)(ネ)(ウ)の時ときは小反撥こはんはつがあるから、一寸目ちよつとめ先賣まきうりを遠慮えんりよせねばなるまい。

四、〇—□—|—x—|— (ニ)

これは甚だ稀にしか現はれない棒である。一年間に精々二三回位のものであらう。然し非常に恐ろしい線であるから注意せねばならぬ。何となれば大暴落の前徴となることが多々あるからである。現に十一年度の期米には僅か二回より出現せず、而も二回共、大暴落を演じてゐる。一回目は七月廿六日で、この(ニ)の線より無量一千七百丁を下げ、二回目は九月九日に現はれて、翌々日に百八十丁朝寄り下放れ、其日の中に更に五十丁を下げた。そして何れも

大々の暴落の先驅を爲してゐる。近くは本年二月四日及び四月廿六日の兩日に出現してゐるが、前者は三百丁の暴落を爲し、後者は二百五十丁方の大暴落を演じた。そして之れが五、六兩月下げの先驅を爲してゐる。全く恐ろしい棒である。殊に其前日が(イ)(ハ)の時は、一層恐ろしいやうである。然し應用するにも出現数が多いから残念であるが、よく心得て置かねばならぬ。

五、〇—×—□ (ホ)

度々出る棒である。性質は硬軟相央ばするものであるから、前日の線についた方が宜しい。即ち前日が軟線であれば賣、硬線であれば買である。然し前日が(ル)(カ)の時は無條件で賣つて宜い。變化の多い線であるから駈引は慎重を要する。

六、○—×—□—|—(へ)

この棒は、翌日上寄ならば、是非買はねばならん、當日利にならぬとも翌日は必ず利になる。下寄

の時は見合はせ、然し大下寄りの時は、それが底値となることが多い。尙ほ前日(ツ)の時は、十中九は下落するから、上寄下寄に拘はらず賣である。月一二回は出現する。

二、第二種線(前場上が最上位にあるもの)

一、T—○—|—□—|—×—(ト)

多く持合放れに現はれる線である。當日の寄付に従へば宜からう。即ち上寄の時は買ひ、下寄の時は

賣るのである。百分の中八十五までは下寄のやうであるが、餘り大下放れの時は一寸見合せ。

二、 $\text{---}\square\text{---}\times\text{---}\square$ (チ)


この線などは是非應用して貰ひたいと思ふ。何故ならば極く簡短で、當日上寄の時は買、下寄の時は賣つて置けば、目を瞑つてゐても儲かるからである。然し株式も米も綿糸も、この棒は相場の時は出現せず、而も度々と出ないから、折角の好線も利

用する時が少いのは遺憾である。一年の中先づ二三回位のものであらう。

三、 $\text{---}\square\text{---}\square\text{---}\times$ (リ)

研究して置きたい線である。この線が現はるれば、その翌日は必ず小高いところがある。そしてそれが又必ず小天井となつてゐる。例證の多いのに苦しむほどである。尙旬日持合の時にこの線が現はれたら最早戻り無しの天井となることが多い。何れにして

も賣から出たら間違ひは無ない。然しかし一寸注意して置おきたいのは、株式で前日ぜんじつが(チ)で(リ)となつた時は決けつして賣つてはならぬ。茲こゝ兩三年來ねんらい鐘新及かねしんおよび大新だいしんにこの(チ)(リ)が五六度も現あらはれ、而しかも悉ことごとく上寄うはよりして昂騰かうたうしてゐるから、この點てんの變化へんくわも考かんがへて置おかねばならぬ。其他そなたは大抵賣つて出でて差支さしつかえ無ない。

四、 (又)

この棒ぼうなどは、著者ちやくしゃが自慢じまんで紹介しょうかい出來る線せんである。

これは翌日よくじつ上寄うはよりならば、是非成行買ぜひなりゆきかひを試こころみて宜よろしい翌日よくじつも高く、其上數日そのつへすうじつかん間は續騰ぞくたうするのであるから、これほどウマイことは無ない。その上うへ一箇月かげつの中うち二二回は出いでて、而しかも大抵たいていは上寄うはよりと來くるから、こんな結構けつこうな線せんは無ないのである。

尤もつとも下寄したよりの時ときでも買かつて宜よろしいが、然しかしこの場合ばあひは、一旦たんしたね下値したねを見みせて翌日よくじつから騰貴たうきするやうである。この點てんも豫あらかじめ心得こころえて置おいて欲ほしい。株界かぶかいに於おける例れいは、昨年さくねん十月十日じふじつ、前日ぜんじつ(ト)にて上寄うはより、當

日の(ヌ)が底値となつて大暴騰したなどはその著しいものである。期米、綿糸も大抵その通りなつてゐる。

五、 (ル)

少い棒である。先づ一年三四回位のものである。大抵は持合の極、相場の動けなくなつた時に現はれるやうである。此時は持合下放れの兆となるものであるから、賣つて置けば間違ひは無い。二三日中に

必ず利を見ることが出来る。要するに、強いやうで弱いのが本線の特徴であるから、その心で断引することが肝要。

六、 (オ)

一寸不思議な性質を持つた棒である。本来は(ル)と同じく、持合相場の中に現はれるのであるから賣つて置けば間違ひは無いが、前日急騰、或は急落の後、後に現はれると、それが妙に中休みとなる。そして

更に急騰或は急落するのである。故に、さうした場合は、必ず相場に附随するやうに駈引せねばならぬ。非常に面白い棒である。

尚ほ言つて置きたいのは、この棒本来の性質としては非常に軟弱なものであると言ふことである。

三、第三種線(後場寄が最上位にあるもの)

一、□—○—|—x (7)

これも餘り出ない棒である。賣か買か容易に斷定

出来無い變化ある線で、著者も未だ責任ある解答を躊躇するが、結果から見れば、當日安ければ翌日必ず高く、當日高ければ翌日必ず安い、當日の反對に出ることだけは確か。そして底値は無いが、天井を打つたことは三年中に三度ある、此點から見れば賣の方から出るのが得策のやうだが、前言つたやうに未解決の棒だから後日の研究に俟ことにしやう。大體の性質として、變化多い棒と心得へて置くが宜からう。

二、□—○—×— (カ)

これも是非應用して貰ひたい棒である。相場が高値高値と進んで、一寸伸び悩むことがある。斯ういふ時によくこの棒が現はれるのである。そしてこの棒が現はれた翌日から五六日間は下げ続ける。これは必ず間違ひの無い現象である。成行賣の一本槍である。尤もその下落する値巾は、時と事情によつて一概に言はれないが、上げた値巾が大であれば従つ

三、□—|—○—×— (ヨ)


て下げる値巾も大、ヒげた値巾が少であれば従つて下げる値巾も少であると心得へて置くが宜しい。米綿糸には最近その例は現はれないが、新鐘には二月の高値に出現した、そして結果上げた丈下げた。稀にしか現はれない棒であるが、非常に確實な軌道を辿るのであるから、是非應用して儲けて戴きたい。

非常に悪く見へるので成行賣でも試みたいやうな

心持がする棒であるが、事實は反對で仲々侮れぬ意味を持つた線である。上寄は無論買ひで、下寄りでも買つて置けば、必ず高値を見ることが出来る。昨年九月の新鐘、十一月の米、一月の米は皆この(ヨ)で底入した。

然し變化がある。それは前日(ム)(ウ)(ラ)の如き硬線の翌日、或は(イ)(ハ)の如き力強い軟線の翌日に出現した時は、決して買つてはならない。妙に天井を打つからである。同じ一本の線でも、前日の關

係如何で全然反對の結果を來すとは、何と不思議な性質をもつた棒ではないか。

四、 (タ)

一寸面白い棒で、暴騰も暴落もするといふ變な性質を持つてゐる。その駆引は、翌日寄付(上寄でも下寄でも)より高値無き時は賣、より安値無き時は買である。そして三日位は一方へ片寄るから相應に儲けられる。最近の著しい例では、一月の米に二

回現はれ、一回は上寄高値無く暴落し、一回は下寄安値無く暴騰した。二月の新甫も上寄安値無く暴騰した。株界でも震災後の大新、新鐘に兩三度現はれ何れもその通りの結果となつてゐる。三品の方では一月四月の兩度に現はれ、之れまた同一の結果を示した。然し一體に出現度数の少い棒で、先づ一箇年七八回位のものであらう。

五、□—×—○—(一)

これも餘り現はれない棒である。一箇年先づ三四回、株では一二回であらう。大抵の場合が高い。或は寄付を最安値として一本調子に進むことがある。或は當日前場中伸び悩んで後場に急騰することがある。何れにしても買つて置けば利が見られる。然し出現の時は、如何にも悪る目の時が多いから注意してゐぬと往々に見逃す。

六、□—×—○—(二)

相場續騰の際に現はれる棒である。頭重い商状を呈するか、或はこれが動機となつて大押目を作る賣の方から出たら間違ひが無い。時に前場中引かされることがあつても、翌日は必ず利を見ることが出来る。是非應用せねばならぬ線である。一月の大新一月の米は共に(タ)(ソ)(リ)となつて右の結果を現はし、二月の米は翌日(ニ)といふ恐しい線に變化して大暴落をやつた。また昨年十一月七日の新鐘はこの線で續騰後の大押目を作り、三月の綿糸もこれで

二十圓押しを演出した。然し前日(ホ)(ウ)(へ)の時は一時見合せ、二三日模様を見てみねばなるまい。

四、第四種線(後場止が最上位にあるもの)

一、×—○—□ (ツ)

度々現はれる棒で、非常に興味の深い性質を持つてゐる。何となれば、時代によつてその方向が變化するからである。即ち相場の昂騰時代には硬線となり、下落時代には弱線となり、持合時代には持合線

となつて、千變萬化の妙味を見せるのである。故にこの線が現はれたら、先づ現在は如何なる時代であるかを第一に考へねばならぬ。そして昂騰時代ならば買、下落時代ならば賣、持合時代ならば見合すといふ駈引法を探らねばならぬ。六ヶ敷い代りに、また非常に妙味のある線である。

然しこれが月末に現はれた際は、右の除外例で多く翌月の昂騰を暗示してゐるやうであるから、新甫を目當てに買つて出ねばならぬ。それから言つて置

きたいのは非常に足の早い線であるから、駈引を機敏にやらぬと、相場の方が一足先へ行つて仕舞ふ恐れがある。この點を注意して居らぬと相場に取残されるから心得へて居らねばならぬ。

二、×〇〇〇〇〇〇 (ネ)

これも多く出来無い棒である。前の(ツ)とよく似てゐるが、(ツ)ほどの變化も無い。比較的單純で賣から出たら間違ひが無い。また十中八九は上寄りと

来るから甚だ好都合である。そして當日の寄付が其日の高値であつたら、更に翌日も續落するのである。昨年十一月二日の米が五十丁上放れて跡下落したのや、一月末の米が上寄りして七十丁反落したのや、一月十日の三品、同じく一月廿日の三品が何れも上寄りして暴落した等は、數ある例證の中でも最も著しいものである。株界では、本年に入つて、二月の新鐘に二回現はれ、而も二回とも如上のやうな結果を辿つた。如何にこの線の性質が上寄して下落する

道程を辿りたがつてゐるか、知れやう。然し茲に注意せねばならぬことがある。それは豫想以上の大下放れを演じた時、必ず賣つてはならぬことである。何となれば、さうした場合は、往々反對の足取を辿るからである、然し大下寄の時は餘り無いから、先づこの線は賣と斷定して差支無い。

三、×———○———□ (ナ)

前の(ネ)と一寸似てゐる。強いやうに見えるが事

實は反對で性質は脆い。餘勢として上寄でもしたら少々の高値はあらうが、決して長くは續かない。故に、さういふ高値は透さず賣向はねばならぬ。若し下寄でもしたら成行賣と心得べく、何れにしても賣から出れば意外の利益が見られる。最近の例では一月八日の米、三月一日の米、四月二日の米で、何れも上寄して跡暴落した。弱線中の弱線、見かけによらぬ悪い棒と心得べし。

四、×——□——○ (ラ)

一箇年に二十五回から三十回も現はるといふ棒である。元來騰貴性の棒で、十分に上げる素質を備へてゐるが、當日は反動的に少々下押すことがある。つまり絶好の買場を拵へて呉れるのである。引かされる覺悟で買はねばならぬ。尤も波瀾時代の(ラ)は色々の變化があるから、寄付より少し見合せ、安値の現はれるのを待つ方が宜い。何れにしても、買の方から出るべき線である。

然し前二三日中に(ム)(ウ)(リ)(ロ)の線が交つて

ある時は、目先小天井として駈引するが宜い。この線の翌日(ニ)(ヨ)の時も注意を要する。株、綿糸、期米の百分統計を述べると、株では買八十七パーセント、綿糸は七十七パーセント、期米は九十パーセントであつた。即ち約八九割は買に有利であるといふことが分るのである。

五、 $\times \parallel \square \parallel \bigcirc \parallel -$ (ム)

強い素質を持つた線である。大體は(ラ)と同様と

心得へて宜い。特殊の點を言へば、この(ム)は往々底値から立直りの第一階梯となるから、値頃の如何によつては長期の思惑をすれば大利を得られる。この點が(ラ)と違ふし(ラ)よりも興味の多い所である。然し前日(ム)が連続する時は目先賣。また(イ)(ハ)の如き弱線の後へ出る時は持合相場に入る徴候であるから、その心して駈引せねばならぬ。

六、 $\times \parallel \square \parallel - \parallel \bigcirc$ (ウ)

よく現はれる棒で、米では月に二三回、株では四五回、綿糸では昨年九月から年末までに實に二十一回も出現した。一體に大勢の暴騰時代ほどよく出る棒で、この棒の出現度數で上げ勢力の如何が解ると思はるゝ位である。大體が強硬なのであるが、妙に當日は下押す、下寄した場合など、更に下押す値巾が大きいやうである。

然し絶対に買の線で、その下押した所は是非買はねばならぬ。原來が昂騰相場の間に出る棒である

から、必ずより以上の高値があるのである。(イ)と正反對でそして同意味の棒だ。

尙ほ旬日上げ續けの場合、前日(ウ)の連續、或は陽象が三日も續いた場合は、一寸買を見合せて形勢を觀望して見なければならぬ。長が足(後段に説明す)の場合も同断である。

第五、變型線の見方

目先野線の根本を爲すべき二十四線の解剖は大體右の通りであるが、その外に尙ほ色々の變化があることを御承知願ひたい。この變化を一々書いてゐた日には、到底一冊や二冊の本でも盡されないし、また相場の本來として、さう一々定石通りに行くもので無いから、要は、たゞ以上の各線の原理を巧みに應用するにある。さうしたものが結局勝利を得る

のである。吳々も實地と照合して適宜の策戦を講せられたい。たゞその變化の中でも、是非知つて置かねばならぬもの五六を擧げて置く。

一、上下一致の變型

相場により前場寄と後場止が同事のことがある。これを上下一致の變型と稱してゐるが、この變型にも尙ほ二種ある。一は持合相場の時に起つたもので一は大波瀾の時に生じたものである。前者の時は尙

前場寄と後場寄と同時となることがある。これは硬軟勢力の稍々相伯仲せるものであるから、多くは前日の線型に従ふのである。然し茲に注意すべきはこの變型の上下間隔が非常に大きい時——即ち前場止と後場止とが同時點から非常に離れてゐる時（上下何れにしても）は、前日と反對の結果を示すものである。古來から言ひ慣はした槽といふ型となるのであるから、注意せねばならぬ。

三、前止と後寄同事の變型

持合相場の時によく出る變型である。上下間隔の如何にもよるが、賣買何れにしても太した利益が無いから、先づ見合せた方が宜しいやうである。

四、前止と後止同事の變型

多くの場合、翌日は當日と反對の結果を現はす、即ち當日安ければ翌日高く、當日高ければ翌日安い

そして往々相場の行問へなることがある。然しこの場合もよく前日及び前々日の線型を参酌せねばならぬ。

五、前場寄止同時の變型

これは後場寄によつて左右せられるやうである。後場寄が大きく下放れた時、或は大きく上放れた時によつて勢力の相違はあるが、大體に於てその後場寄に隨いて行くのが法である。

六、二日続きの變型

變型が二日も續くことがある。この場合は複雑なもの益々複雑となつて、結果どうして宜いか分らぬやうになるものであるが、要するに變型と言つても以上の六個を出でないものであるから、それ等の性質を色々参酌し、更に前々日の線型を見れば、大抵何の方向に相場が動いてゐるか分る譯である。それ等を一々解釋した日には益々紛糾を重ねるやうな

り、讀者の頭を混亂さすばかりであるから省略した法は簡なるを以て真とす、複雑で應用の出来ないやうなものは、決して眞の法では無いのである。尙ほ一言注意して置きたいのは

七、長が足と短か足

との特質である。足の長短は格別問題で無いやうだが、足の短いのと長いのは相場の性質に非常の相違がある。假令へば同じ日足の(イ)でも、長い足

の(イ)と、短い足の(イ)とは一寸性質が異なるのである。即ち短い足の(イ)は、前途尙ほ長い足の(イ)——或は其他の軟線があることを暗示するのであるから、長い足の(イ)以上にタチが悪い。これと反對に短い足の(ウ)は、前途尙ほ長い足の(ウ)——或は其他の硬線があることを暗示するのであるから、長い足の(ウ)以上に相場は強いのである。この二つの例は、硬軟の兩極端を取つたものであるから、以て他を類することは出来無いが、總じて長い足は相場

の中期、或は末期に出るもの。短い足は相場がまさ
に動かんとする前か、或は行詰つて形勢のまさに轉
化する前に出るものと心得へて置くが宜しい。

第六、其他の應用罫線

一、天井底値の見方

天井及び底値の見方は大勢觀測の範圍に屬する
が、目先相場にもこれを知ることとは最大緊急事であ
るから、序に罫線學の秘法を公開し置かう。
天井及び底値の觀測には古來から色々な方法があ
る。日割、月割、或は金割(値頃)、又は單に人氣の

點のみを以て見るものなど、その方法は何十種あるか數へられないが、多くは餘りに抽象的であつて遽に用ひられない、假令へば斯界の古哲本間宗久翁などの見方は、根本原理を月割にとつてゐるのであるが、それによると、(一)七八月天井値段の米は十二月迄下るものなり、(二)正月頃より三四月頃迄天井にて持合の米は五六月決して下るべし、五月十分下る時は六月急上げ也、(三)冬中より正二月頃まで底値持合の米は五六月決して上る也、七八兩月底値の

米は十二月正月迄上るべし——といふ風に、主として月數は六箇月説となつてゐる。處が六箇月説ばかりか、いふにさうでも無い、中には三箇月説もある。(一)底値段にて上る米は、二三箇月急に天井値出ることあり、(二)又曰く其時の模様にて三箇月下げ四箇月目上ることあり、(三)又五箇月より下ることあり、(四)六箇月皆下ることあり。さうかと思ふと一十一、十二月迄下値の米は夏上げと心得ふべし、七月頃まで上る者也、(二)急に上下する米は天井底の月限定まら

ず、といふやうな八九月説もある。斯うして見ると宗久翁の説は月數一箇月以上八九箇月迄ある譯で、果して何れを探るべきか茫として殆んど標的が無い。尤も翁は、此外に更に上下の割合、即ち金割を以て補ふべしと言つてゐるが、之も餘りに抽象的で、経過の日數と高低の割合とは必ずしも相並行するもので無いが故に、實際論として之を見れば幾多の不足が湧いて来る。本間翁にして既に然である。以て他の取るに足らぬ俗説が、如何に無意味、如何に

無價値であるかを推して知ることが出来るではないか。

之等に比べると、罫線學上の鑑識法は比較的正確であつて、その方法もまた簡便である。即ち

一、相場新高値をつけ、そして寄付より大引の安値に引けたる日、二日續く時は、天井、又は一時の上げ止まりである。

一、底値の場合は右と反對であつて、相場新安値をつけ、そして寄付より大引の高値に引けたる日、二

日、續く時は、大底入または一時の下げ止まりである。
中間に於ける往來相場の場合にも、またこの法によつて上問、下問を知ることが出来るのである。尤も中間の上問、下問は、多く二日も續かず、大抵は一日で済まして仕舞ふやうである。
また本野線によつて天井底値を知るのは次のやうな方法で行ふ。

二、天井時代の線

一、(ウ)が二三日も續いた後(リ)(ヨ)(レ)(ツ)が現はれた時
一、(リ)の前後へ(ウ)(イ)(ハ)(レ)(ッ)(ツ)がウマク箆つた時
一、(ヨ)の前日(ム)(ウ)(ラ)となり翌日軟線の時
右の場合は何れも天井を示すものである。

三、底値時代の線

一、(イ)(ハ)が二三日も續いて現はれた時

一、(イ)の翌日に(ヨ)(ロ)(ホ)(へ)(タ)(ム)が現は
れ、更にその翌日も以上の中の線型が出現した時
一、(ハ)の翌日へ右の線型が現はれ、更にその翌日
も以上の中の線型が出現した時
右の場合は何れも底値を示すものである。尤も以
上の方法では應用する範圍も少ないが、その代り殆ん
ど十發十中の的確なところである。尙ほ各線の解剖
をよく參酌せられたい。

四、月末月初の小掬法

月末軟勢の棒、假令へば(イ)(ハ)(リ)(ネ)など現
はれ、而も二三日續いて下げる時は、月代りして新
甫より必ず下げるものである。之と反對に硬線、假
令へば(ラ)(ム)(ウ)など現はれ、而も二三日續いて
下げざる時は、月代りして新甫より必ず下げるもの
である。

五、來月の相場を見る秘法

本罫線によつて來月の相場が分る法がある。法と

言はんよりは寧ろ統計上の結論によつて得た発見である。即ち來月の相場を見んと欲せば、先づ本野線の日足を骨髓と皮肉に分類する。骨髓とは前場寄付と後場大引との中間値巾で、○印と×印との間を言ふのである。そしてこれ以外に奔出した値幅が皮肉で、この皮肉を潜勢力とし、骨髓を現勢力とし、兩勢力の相違を見るのである。即ち別に一野線を作つて、この潜勢力(皮肉値段)の幅を上値と下値に區分し、日々の分を一箇月間通計する。そして上下何れ

が分量が多いか、その値巾を比較するのである。翌月の趨勢は、大抵その數の多い方に行くものである。即ち上値幅の多い時は買方針を樹て、下値幅の多い時は賣方針を樹てる。これで來月は安いか或は高いか、臆氣ながら解るのである。毎月骨髓以外に奔逸する値段は、人氣は旺盛だが、賣押へ買支へ或は其の他の現實材料に押へられて伸力を阻止せられてゐる。それが限月の交替と共にその潜勢力が發揮せられるからである。

五、來週の高下を見る法

來週らいしゅうの相場さうばも、亦また、前述ぜんじゆつの方法ほうほうによつて見みられる。
即すなはち骨肉こつにくと皮肉ひにくとによつて、現勢げんせい力りき及び潜勢せんせい力りきの如ごとく
何なんを見み、上値うね幅は下値したね幅はの長短ちやうたんによつて、相場さうばの方向ほうかう
並ならびに勢せい力りきを知覺ちかくするのである。然しかし尙なほその外ほかに
次つぎの一法いっぽうを參酌さんしやくせられたい。即すなはち木曜日もくようびと土曜日どようびと
の日足ひあしを對照たいしやうし、木曜日もくようび陰性いんしやうにして、土曜日どようび陽象やうしやうな
れば買かひ、木曜日もくようび陽象やうしやうにして土曜日どようび陰象いんしやうなれば賣うり、二

日か共同ともじく陽象やうしやう、或あるは同じく陽象やうしやうなれば、土曜日どようびの
大引おほひが木曜日もくようび大引おほひの上値うねなる時は買かひ、下値したねなる時は
賣うりるのである。前者ぜんしやは主しゆとして來週らいしゅう相場さうばの勢せい力りきを見
るに用もちひ、後者こうしやは主おもに休日きうじつ明けに玉ぎよくを持越もちこさんとす
る場合ばあひに用もちふる。二者しやの法ほうを適宜てきぎ參照さんしやうの上、更さらに日
足あしの線型せんけいによつて、その方針ほうしんを決けつすべきである。
尙なほ色々いろくと罫線けいせん上じやうに於おける見方みかたを述たべてみたい
が、それ等らは多く大勢觀たいせいくわんの範圍はんいに屬ぞくするものである。
る。本書ほんしよの姉妹編しまいへんとして近く刊行くわんかうする『大勢の罫線』

に於いて、その悉曲を盡さうと思ふ。

目先の罫線 完

大正十三年七月二十五日印刷 (目先の罫線)
大正十三年七月三十日發行 定價金貳圓

不許
複製

著者 近藤保一
發行者 林與生

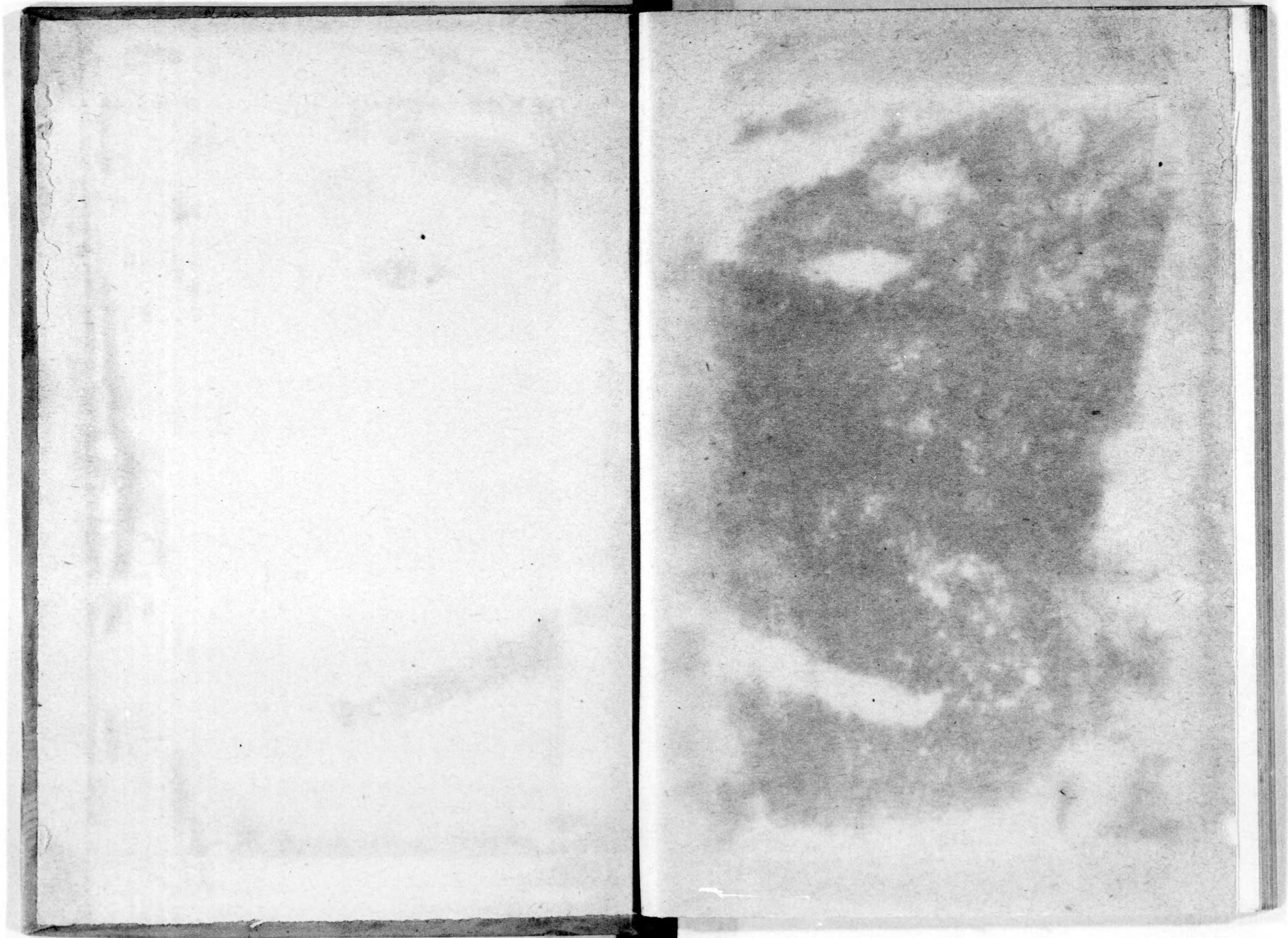
發行所 大阪市西區本町二番町二二〇
林與生財界研究所

電話西八九一
振替大阪七一五五一番

印刷人 大阪市西區阿波野二番町一 堀越 幸
印刷所 同 日本印刷製本株式會社

291
753

Faint, illegible text or markings on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.



終

